福和　伸夫さん

1957年名古屋生まれ。1981年名古屋大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程前期課程修了後、清水建設（株）に入社し、原子力施設の耐震設計に関する研究業務に従事。1991年名古屋大学工学部建築学科助教授。1997年同先端技術共同研究センター教授。2001年同大学院環境学研究科教授。
中央防災会議専門委員、総合科学技術会議専門委員、地震調査研究推進本部委員をはじめ、文部科学省、国土交通省、気象庁、自治体などの防災関係の委員に携わる。2003年日本建築学会賞（論文）、2007年科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞、2008年日本建築学会教育賞、地域安全学会技術賞など、各賞を受賞。

近い将来、巨大地震（東南海地震、南海地震）の発生が予想されています。地震による被害をいかに少なくするか、ご自身の研究、教育、さらには活発な産学官連携活動を通じて、その中心となってご活躍である名古屋大学大学院の福和伸夫教授を研究室に訪ね、お話をうかがいました。

インタビュー（Q：広報委員、A：福和先生）

Q　研究テーマの耐震建築に興味を持たれたきっかけは何ですか。

A　清水建設にいたときに原子力発電施設の耐震解析の仕事をしていたことが出発点です。原子力発電所の地震に対する安全性をいかに確保するかということが主な研究テーマでしたが、その他にも、デミング賞取得のためのTQC活動、ネットワークとWSを利用したペーパーレスオフィス環境作りにも携わり、現在の活動に役立てています。最初に耐震の大切さを痛感したのは、米国出張中にロマプリエタ地震（サンフランシスコ、1989年）に遭遇したこと、さらに、阪神淡路大震災（1995年）の甚大な被害を目の当たりにしたことです。

Q　名古屋大学でのご活躍の内容を具体的にお聞かせ下さい。

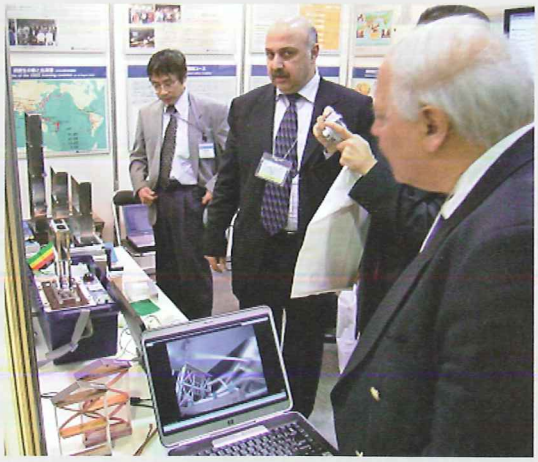
A　中央防災会議や地震調査委員会の検討により、南海トラフでの地震発生の切迫性が明らかになってきた中で、名古屋地域の防災力を上げることを目指して、活動を続けてきています。今世紀前半に起こる可能性が大きい我が国最大の国難ともいえる巨大地震に対する危機感を全員が持ち、それに対する社会の備えを抜本的に進めなければならないのです。そうしないと、日本という国家そのものが破綻しかねません。耐震化のための科学的な研究・技術開発に加え、社会の耐震化へ向けての行動を誘導する必要があります。このため、様々な階層に対して、防災意識の啓発や、防災に関わる人材の育成に力を尽くしております。具体的な活動は、地域での防災活動の実践にまで及んでいます。

Q　様々な活動を通じて、どのようなことが大切だと思われますか。

A　先ずは人づくりです。防災マインドを持った人々を、教育、啓発活動などにより育て、作り上げることですね。そのために、マスコミの力（月1回のマスコミ勉強会）をお借りしたり、土日を中心に様々な方々を相手に講演（年間約150回）をしたりしております。さらに大切なことは、これらの人たちのネットワーク作りです。また、乏しい予算の中でも工夫すれば、防災教育のためのよい教材を作ることができます。現在、私が考案した教育ツールが全国、いや全世界で幅広く使われているのですよ。（インタビュー後、それらの教材を見せていただきました。一部はテレビなどで紹介されており、ご存じの方もいらっしゃることと思います。）

このようなことを考えながら、これからも、必ず出会うことが分かっている大地震を前に災害による被害を激減させ、社会を破綻させず、次世代に豊かな社会をバトンタッチするための研究、具体的には、人の教育・啓発・行動心理・協働、建物・地盤の地震時挙動の解明・災害情報データ・社会システム・施策、安価な耐震工法・教育教材、リスクの移転などのヒト・コト・モノ・カネのテーマに総合的に取り組んでいこうと考えています。

地震の揺れ方を説明する教育ツールをお持ちの福和教授



国連世界防災会議での展示

福和教授が開発した教育ツールの数々

Q　予想される巨大地震に対して個人として住宅に対して考えなければならないことは何でしょうか。

A　まずは、安全・安心な都市と住宅のあり方をよく考える必要があります。具体的には、住む場所を選ぶ、壊れない・揺れない住宅を建てる、そして家屋内の安全、地震時のライフラインの確保についてチェックすることです。特に言いたいのは、場所選びを慎重にするということです。せっかく壊れない頑丈な家を建てても、その場所が活断層の上だとか、軟弱な地盤の上にあれば、安全だとは言えませんね。

Q　町作りとして考えなければならないのはどんなことでしょうか。

A　地震危険度の高い場所からの撤退によるコンパクトシティ作りだと思います。自然の怖さと優しさをバランスよく考えた町作りということが大切で、目指すのは、自然に対して畏敬の念を持ち、人間の生きる力を取り戻せることができる町作りということでしょうか。

Q　最後に、全学同窓会について、どのようなことを期待されますか。

A　箇条書きにすると、

・無理をせず長続きするシステム作り
・明るい雰囲気を大切に
・会の存在感を強く感じることなく個々人がさりげなく交流できる場
・社会に開かれた大学におけるメディエータ役

ということになります。

Q　本日は、先生の貴重な時間を割いていただいて、インタビューに応じていただき、大変ありがとうございました。